Rikkyo Psychological Research
2020 Vol. 62, 18-30

原　著

娘のアイデンティティ形成を支える親密な母娘関係
――アガサ・クリスティーの伝記資料の分析から――

立教大学　　赤木　真弓[1]

Features of the Mother-Daughter Relationship Supporting the Daughter's Identity Formation: An Analysis of the English Novelist Agatha Christie

Mayumi Akagi　(University of Rikkyo)

This paper focused on the intimate mother-daughter relationship that supports the daughters' healthy development. The life of the English novelist Agatha Christie was examined as a case study of healthy identity formation based on an intimate relationship with the mother. Furthermore, this study blended quantitative and qualitative methods by analyzing Christie as a typical representative of the "Connected" group. The results indicated the following. (1) Christie developed "basic trust" because she felt loved by her mother, who was always supportive and encouraging of Christie. (2) Her mother always made her believe that she was able to do anything that she wanted, which improved her "basic trust" and helped her develop competence. (3) In her adolescence, Christie developed a sense of identity such that she could have a happy marriage. Her confidence was based on her intimate relationship with her mother, who was her role model.

Key words: Mother-daughter relationship, Identity, adolescence, Biographical analysis, Agatha Christie,

Erikson（1959　西平・中島訳 2011）は漸成発達理論において，青年期は親からの自立[2]とアイデンティティ形成が重要なテーマであり，アイデンティティを形成するきっかけは，両親，友人，恋人といった他者との関係性の中にあるとしている。したがって，親子関係はアイデンティティ形成にとって重要であると考えられるが，親子関係の中でも母娘関係は，他の関係に比べて心理的距離が近く，親密な関係を築きやすいと言われている（Fischer，1991，高木・柏木，2000）。また，渡邊（2004）は，青年期の娘の母親への依存意識と絆意識は分離されず，きわめて情緒的に親密な関係であり，それは成人期にも変わらないとしており，Gilligan（1993）は，娘の場合は母親を最初のロールモデルとし，その愛着関係から「女性性」を獲得することになり，母親との分離が自立の妨げになる，と述べている。さらに，Rastogi（2002）は，母親と娘との関係性をはかる尺度として，結合，相互依存，ヒエラルキーへの信頼からなる The Mother - Adult Daughter questionnaire（MAD）を作成し，母親との関係における親密性，依存性，分化との関係を分析した結果，家族の中での分化は MAD の 3 つの下位尺

[1] 本論文を執筆するにあたり，ご指導いただいた大野久先生，ならびに貴重なご意見をいただきました三好昭子先生，茂垣まどか先生，今井美智子先生に心より感謝申し上げます。

[2] a 自立（independence）は親離れ・独立を表す言葉であり，自律（autonomy）は es（id）を自我がコントロールするという意味合いが強い概念であるが，自立と自律はともに多義的，多次元的概念として扱われており，同義語のように扱われる場合もある（平石，2014）。本稿では，引用元で用いられている表現を優先した。

度と相関がみられなかったことから，娘は自律し，分化していてもなお，母親にアドバイスを求め，ヒエラルキーを信頼している場合がある，という可能性を示した。そして，水本（2015）は母親への親密性が娘の精神的自立にどのような影響を与えるのかについて検証し，母親が無条件に自分の情緒的欲求を受け入れてくれるという安心感は，母親との信頼関係の構築を促し，娘の適応的な自立を支える，と推測している。

以上のことから，娘は母親との関係が深く，母親との親密な関係性の中でアイデンティティを形成していく，というケースが多いと考えられる。赤木（2018）は，母娘の分離と結合に着目してクラスタ分析を行い，母娘関係を「反発群」「親密群」「自立群」「葛藤従属群」の４つに分類した。この中で，母との結合が強いタイプとしては健康的な結合タイプである「親密群」と不健康な結合タイプである「葛藤従属群」を見出している。しかし，クラスタ分析では，各群の特徴の違いについての研究結果は得られても，その属性を持つ人たちが，どのような意識を持ち，行動する人たちなのかは具体的にはわからず，測定尺度の項目内容から推測するしかない。また，パス解析などを用いて事前に想定した媒介変数から，因果性を推測することはできるが，具体的にどういう心理現象として現れるか，ということについては，やはりみえてこない。また，平均値の違い，変数間の相関，因果関係の推測などの現象は把握できても「なぜ，そうした現象が発生するか」についての「意味の把握」はできない。アイデンティティという概念については，Erikson（1959　西平・中島訳　2011）が，「A sense of Identity」という言葉を使っているように，具体的な行動ではなく，抽象的な「感じ方」であり，さらに無意識に感じている面も含んでいる。したがって，質問紙調査だけで分析することには限界があると考えられる。

以上のような量的研究法の短所を補う方法として質的研究法がある。最もよく用いられる手法は面接法で，一人の調査協力者についての情報量は，量的研究と比べて多く，具体的事例に関する資料収集が可能である。面接法は質問に対する回答だけではなく，対象者を観察することができるため，対象者の内的世界を把握することに優れており，対象者の主観的な世界をその背景も含めて把握することができる。しかし，１－２時間程度の面接時間で得られる情報には限界があり，面接の時点で回顧的にとらえられる過去は現在構成された過去である，という課題が残る。さらに，昨今は，個人情報に対する守秘義務が厳しく求められることから，研究上の制約が大きくなっているという課題がある。

そこで，赤木（印刷中）は母娘関係の４つの群のうち，不健康な結合タイプである「葛藤従属群」の典型と推測される作家のマーガレット・ミッチェルについて，伝記研究法を用いた具体的な事例検証を行い，特徴の理解を深めることを試みた。伝記研究法は，Erikson（1958　西平訳　2002）が「青年ルター」で試みた心理歴史的方法をモデルとして，西平（1983，1990）が分析の枠組みを完成し，大野（1996）によって継承された質的分析手法である。伝記研究法の利点として大野（2008）は，一人の人物についての情報量が面接法に比べて圧倒的に多いこと，一生涯の時間的展望の中で読み取れること，歴史的・社会的背景が明確であること，公共性が高く，守秘義務への配慮が不要であること，などをあげており，これらは，面接法の欠点をクリアしている。特に，一生涯の資料が得られることは，連続性と斉一性が重要とされるアイデンティティについて理解するために大変有効な手法であると考えられる。

ミッチェルについての分析の結果，母の押しつけと母への劣等感による従属が娘のアイデンティティ形成を困難にするという，葛藤従属群の特徴が具体的に示され，母娘の密着した関係が生み出す不健康な発達についての理解が深められた（赤木，印刷中）。その一方で，健康な発達について研究することも重要であると考えられる。昨今の我が国では，「一卵性母娘」（信田，2008）といわれるような仲良し母娘が増加していると言われているが，このことは，赤木（2018）において，母

娘関係の 4 群のうち ,「親密群」が全体の約 40% と最も多かったことにも表れている。母からの押しつけや母への劣等感が低く，母と親密な関係を築いている「親密群」は，自尊感情や信頼感が高く, アイデンティティの感覚も高かったことから，母親との親密な関係性の中でアイデンティティを獲得していくケースではないかと推測された。

そこで本研究では，伝記研究法を用い，母娘関係で最も多かった, 健康的な結合タイプである「親密群」（赤木，2018）の典型として，母親との関係をベースにアイデンティティを形成していったと考えられる作家のアガサ・クリスティーをとりあげ，伝記研究法を用いて，親密な母娘関係が娘のアイデンティティ形成に与えた影響を具体的に検証することを目的とする。

アガサ・クリスティー（以下，クリスティー）は，1890 年，イギリス生まれの作家で，小説の多くは世界的なベストセラーとなり,「ミステリーの女王」と呼ばれた。クリスティーは，比較的裕福な家庭で，両親と使用人に大切にされて育ち，特に母親と親密な関係を保ちながら成長している。小学校に行かず，家庭で教育を受けたクリスティーは，青年期になると，オペラ歌手やピアニストを目指すが力量不足であきらめ，小説を投稿するが評価されないなど，アイデンティティの模索と挫折の様子がうかがえる。クリスティーがそういう中でもアイデンティティ拡散（Marcia, 1966）の状態に陥ることなく，健康的な青年期を過ごしていたのは，母親との親密な関係が，自己信頼を高め，健康的なアイデンティティ形成を促進していたからではないかと考えられる。

本研究では, まず, クリスティーのアイデンティティ形成に強い影響を与えたと考えられる母の養育態度，および母娘関係をあきらかにする。さらに,「青年期のクリスティーはなぜ確かなアイデンティティの感覚を持ちえたのか」という心理学的問いを設定し,「母が常に味方になり，肯定してくれることで，十分な基本的信頼感を獲得できていたからではないか」という仮説をたてて，これを伝記資料から検証していく。

方法

実証研究が行動の予測であるのに対し，伝記研究は生育史と結末が固定されており，なぜそういう行動にいたったのかということを論証していく。具体的には心理学的仮説をたて，蓋然性の高い解釈を検討していく研究法である（大野, 2008）。本研究では，大野（1996），三好（2008），赤木（印刷中）を参考に，伝記研究法における個別分析の手法（大野, 2008）に従い, 分析を進める。まず，生涯の年譜に，心理学的解釈を加えた心理学的年譜を作成し，生涯の概観を行う。次に，その人物の一生に現れたアイデンティティの諸相と行動，生き方との関連について「彼女は，なぜ～だったのか」という心理学的問いを設定する。さらに，それに対する心理学的な解釈としての仮説を提示し，解釈に必要な根拠を伝記資料から列挙して（列挙法），仮説を論証していく。

分析対象とした資料としては，まず,『アガサ・クリスティーの生涯』上下巻（Morgan，1984 深町・宇佐川訳　1987）を用いた。これは，クリスティーの死後，クリスティーの娘が，関連するあらゆる資料を Morgan に公開し，自由な条件で執筆することを条件に依頼したものである。したがって，クリスティーが出した手紙，受け取った手紙，日記，覚書，原稿，スクラップブックなど豊富な資料に基づき，さらには親族や友人，関係者たちへの綿密な取材を経て書かれており，取材元も明記された，極めて信頼性の高い伝記である。さらに, 出版された伝記, クリスティー評論, 小説から人物を分析している『アガサ・クリスティー』（Gripenberg，1994 岩坂訳 1997），10 代からの生涯の親友であったナン・ワッツの娘への取材を通して，クリスティーの人生，特に失踪事件について検証した『なぜアガサ・クリスティーは失踪したのか』(Cade，1998 中村訳 1999）を資料として用いた。また,『アガサ･クリスティー自伝　上下巻』（Christie，1997 乾訳 2004）はクリスティーが晩年に執筆した自伝である。自伝については，恣意性が入るため，用いる場合にはそ

の点を考慮した。最後に，小説については創作物であるため対象外としたが，当初別のペンネームで出版された『未完の肖像』（Christie，1962　中村訳　2004）については，晩年に出された自伝と酷似しており，一般的に自伝的作品とみなされていること，名前を伏せることで赤裸々な気持ちを書こうとしたと考えられることから，参考にした。

結果・考察

列挙法により抜粋した根拠資料の一部を，養育環境・両親の特徴（Table 1），母娘関係（Table 2），青年期（Table 3）として示す。[3]

養育環境と母娘関係の特徴

養育環境　クリスティーが生まれた時，年の離れた姉と兄はすでに寄宿舎に入っていたため，両親と使用人の中で実質一人っ子のように育てられた。周囲のおとなたちは，みなやさしく，両親も仲睦まじかったようである（1）。クリスティーによる幼年期の回想を見ても，ときに思いがけぬ喜びはあっても，約束が破られて失望したという記述はない（2）。クリスティー自身が「父と母の特別な思いやりに対して感謝の念でいっぱいになる」(5) と振り返っているように，両親の愛を受け，姉や兄によると「たいへんにかわいがられ，甘やかされていた」（6）という子ども時代であった。父は，「彼はニューヨークの社交界でだれからも好かれていた」（7）という人物で，娘の成長もやさしい目で見守っていたようであるが（8），クリスティーが 11 歳のときに病死している。母は，気まぐれで，人目をひき，霊能者のような直観力があるとされており（9），「母から何かをしたらと奨められたら，誰でも実際にそれをすることになる」（10）とクリスティーも振り返っている。直観的で思い込みの強い母は，「アガサを家庭で教育しただけでなく，8 歳までは子供に字を読ませてはいけない，遅いほうが目のためにも頭のためにもよい，という主張を持つようになっていた」（11）という。そのため，クリスティーは小学校に通わず，庭で空想上の友達を作って遊んでいた（12）。

母娘関係の特徴　当時の常識にしたがって，子どもの面倒を見るのは養育係のばあやであったが（19），クリスティーは大好きな母と一緒に，とても濃密な時間を過ごした。「母は同じ話を二度することはけっしてなかったし，遊んでいても，つぎつぎと思いもかけないような発想をした」（21）という人物であった。また，直観的な母は頭の回転が早く，クリスティーも「わたし自身は家族の中の“血のめぐりの悪い子”ということになっていたが，それはいつも好意的なのだった。母や姉の物事に対する反応は並はずれてすばやく，わたしは全然ついていけなかった」と述べている（22）。一方で，算数が苦手であったり（23），ユーモアのセンスがない（24）など，自他ともに認める欠点があったとされ，母を認めつつも，劣等感を持つことはなかったと推察される。

また，泣いている理由を母だけがわかってくれたり，クリスティーの気持ちを傷つける使用人には容赦ない態度を取ったというようなエピソードから，母こそが何も言わなくても自分の気持ちをわかってくれる友と感じていたことが示されている（25，26）。さらに，「母は常に自分の味方であり，いつも彼女に，愛されているという実感を与えてくれ，何をするにも，またどんなときでも，物事に対する能力が彼女にそなわっているように感じさせてくれた」（39）という。例えば，フランス語の家庭教師を雇っても娘が上達しなかったときの母について，クリスティーは「（ひとりめは）見切りをつけた，（ふたりめは）母は父にマドモアゼル・モーウラットはあまり成功ではなかったので，また別の人を探そうといっていた」

[3] 本文中の伝記資料からの引用については，可読性を高めるため，Table1 − 3 の通し番号（Table 1: 1 − 17, Table 2: 18 − 39, Table 3: 40 − 61）で表記した。また，資料中の呼称表記について，可読性を高めるため，一部変更して表記した部分がある。例：アガサ（資料）→クリスティー（本文），クラリッサ（資料）→母（本文）

Table 1
列挙法による心理学的根拠資料の抜粋（養育環境，両親の特徴）

No	内容	引用元
1	10年以上年の離れた姉と兄は，すでに寄宿舎に入っていたため，両親と使用人の中で実質一人っ子のように育てられた。周囲のおとなたちは，みなやさしく，思いやりぶかかった。両親は仲睦まじかったし使用人はまじめで，長続きし，家族は一定したしきたりを守って生活していた。	A, p.73
2	クリスティーによる幼年期の回想を見ても，ときに思いがけぬ喜びはあっても，約束が破られて失望したという記述はない。	A, p.73
3	彼らは彼女の質問にまじめに耳を傾け，彼女の要望を慎重に考慮した。ばかばかしい規則はいっさいなかった。規律のために規律を守らせる，そういうことがあるのをアガサが知ったのは，後年，フランスの寄宿学校へ行ってから	A, p.74
4	幼いころには，周囲のおとなを理不尽に横暴だと感じたことは一度もなく	A, p.74
5	父と母の特別な思いやりに対して感謝の念でいっぱいになる。（クリスティーと使用人のマリーの芝居を）半時間も見せられ，拍手喝さいしなければならないくらいやりきれないことはなかったと思う。	E, p.178
6	姉や兄によると「たいへんにかわいがられ，甘やかされていた。	A, p.76
7	後年，フレドリック(父）の友人のひとりがアガサに語ったように，「彼はニューヨークの社交界でだれからも好かれていた。	A, p.32
8	娘の成長をやさしい目で見守りながらも，独自の超然たる生活をおくっていたが	A, p.49
9	母は，気まぐれで，人目をひき，霊能者のような直観力があるとされており	A, p.28
10	母から何かをしたらと奨められたら，誰でも実際にそれをすることになる。	C, p.49
11	教育にたいするクララの持論は，宗教にたいする姿勢に劣らず変則的，かつ“進歩的”だった。マッジの場合とは異なり，アガサを家庭で教育しただけでなく，このころには，8歳までは子供に字を読ませてはいけない，遅いほうが目のためにも頭のためにもよい，という主張を持つようになっていた。	A, p.56
12	クリスティーは小学校に通わず，庭で空想上の友達を作って遊び，12歳のときに初めて，生きた，本物の女友達が，彼女の生活に登場したのである。	A, p.69
13	アガサは言葉に強い興味を持っていたうえに，天性のストーリーテラーである多弁なおとなたちにまじって，たくさんの書物にとりまかれて暮らしていた。	A, p.56
14	クリスティーは，幸福な子供時代の一つの要因として，「深く愛し合い，結婚にも，親であることにも成功した両親だった」ということを指摘している。	C, p.21
15	「おまえのような妻を持った男はかつていないよ。おまえと結婚して以来，毎年わたしはおまえを強く愛するようになった。おまえの愛情と同情とに感謝する・・・・」（父の死の数日前の母への手紙）	E, p.232
16	「マミー。お父さんはもう安らかよ。幸せになってる。帰って来てほしいなんてマミー思わないわね」と慰めたのに対し，「いえ，わたしは望みますよ・・お父さんが帰って来るんだったら，私はこの世で何でもします・・・私はお父さんがほしい，ここへ戻って来てほしい」と言った。	E, p.234
17	このような父母の幸せな結びつきを身近に見て育ったクリスティーは，大人になったら理想の夫というべき男性がかならず自分の前に現れるだろうと感じて疑わなかった。	D, p.41

注）引用文献は略号で表記。A: morgan（上巻）,1984, B: morgan（下巻）,1984, C: Gripenberg,1994, D: Cade,1998, E: Christie（上巻）, 1997, F: Christie（下巻）, 1997, G: Christie,1962

Table 2
列挙法による心理学的根拠資料の抜粋（母娘関係）

No	内容	引用元
18	旅行先から，“わたしの愛する，かわいい，ちいちゃな娘”に，たびたび便りをよこしている。	A, p.59
19	当時の常識にしたがって，子どもの面倒を見るのは養育係の「ナニー」(ばあや)だった。	C, p.21
20	母と対極にいたのがばあやで，ばあやは，秩序と，平安と，安定との中心だった。	A, p.44
21	大好きな母と一緒に，アガサはとても濃密な時間を過ごした。母クララは同じお話を二度することはけっしてなかったし，遊んでいても，つぎつぎと思いもかけないような発想をした。	C, p.22
22	わたし自身は家族の中の「血のめぐりの悪い子」ということになっていたが，それはいつも好意的なのだった。母や姉の物事に対する反応は並はずれてすばやく，わたしは全然ついていけなかった。・・・・「アガサはほんとに血のめぐりが悪い」といつもやじられた。	E, p.97
23	わたしが算数が好きということが母には不思議でしょうがなかったらしい。母は率直にみとめていたことだが，数学が嫌いで家計の計算が大苦手だったので，父がそれを引き受けてやっていた。	E, p.52
24	父が母によくいっていたように，母にはユーモアのセンスがなかった。	E, p.32
25	ピクニックから帰ってきたクリスティーが泣いているのを見て，ガイドが帽子につけてくれた生きた蝶のせいだと母だけがすぐに理解してくれた。	B, p.37
26	(ペットのカナリアがいなくなり，クリスティーが泣き続けていた時に) メイドがおもしろそうに「ネコかなにかに捕まったんじゃないですか」といったのを母が，今すぐクビにすると脅した。	E, p.53
27	何か困ったことがあった場合の，母の愛と理解の強さである。悲嘆の真っ暗などん底にあるとき，母の手にしっかりつかまっていることが一つの安心だった。母の手に触れていると，なにか引き付けられるような，心が癒されるような気がした。病気のときなど母はかけがえのない人だった。母は自分の力と生気を与えてくれる	E, p.54
28	アガサ自身，クララとはきわめて仲のよい母娘だったことを力説している。	A, p.76
29	(ひとりめは) 見切りをつけた，(ふたりめは) 母は父にマドモアゼル・モーウラットはあまり成功ではなかったので，また別の人を探そうといっていた。	E, p.152
30	夜ごとふたりは本を朗読して過ごした。	A, p.84
31	話し相手として，気晴らしの相手として，母はおおいにクリスティーを頼りにしていたという。	A, p.84
32	母に対して責任を果たしえると考えていた。	D, p.269
33	母は，クリスティーが15歳になると週二回，ミス・ガイヤーの学校に通わせることにした。	C, p.42
34	ミス・ガイヤーの学校に行っていたのは1年にもならなかった。母はまた別のことを思いついた。いつものように出し抜けに，あなたはパリに行くことになったわよ，と母は説明した。	E, p.313
35	母は例の持前の唐突さで，私はもうT女子の学校へは戻らなくていいといった。『どうもあそこは気に入りません・・・考え方がおもしろくありません』。実際のところ，新しいところへ行くほうがおもしろそうに思えた。	E, p.324
36	母が突然，マロニエ校には戻らなくていいといったときも，わたしは驚きもしなかった。	E, p.325
37	祖母のかかりつけの医師がパリで若い女性のための「教養仕上げ」のための学園をやっていた。『この考えをあなたどう思う？』母が聞いた。私は新しい考えを歓迎した。	E, p.326
38	母はもはや教育計画の変更を申し入れることもなくなった・・・母は，直感的にわたしが満足しているということを知ったのが本当のところだと思う。	E, p.326
39	クラリサはいつも彼女に，愛されているという実感を与えてくれ，何をするにも，またどんなときでも，物事に対する能力が彼女にそなわっているように感じさせてくれた。母親の無条件の愛を確信していたからこそ，アーチーが望んでいる，良識のある，自立した妻という理想に向かってめげずに努力することができるようにも感じてもいた。	D, p.84

注）引用文献は略号で表記。A: morgan（上巻）,1984, B: morgan（下巻）,1984, C: Gripenberg,1994, D: Cade,1998, E: Christie（上巻）, 1997, F: Christie（下巻）, 1997, G: Christie,1962

(29) と振り返っている。このように，フランス語が上達しないことを，娘のせいではなく，家庭教師のせいにしていたため，クリスティーは劣等感やプレッシャーを感じることがなかったと考えられる。前述したように，母は 8 歳まで本を読ませないつもりであったが，クリスティーの場合，環境的にこの主張どおりには事は運ばず，読み書きを覚えてしまい(13)，これは，母の計画とは違っている。しかし，母は娘がしたいことを妨げるようなことはせず，旅行先から，“わたしの愛する，かわいい，ちいちゃな娘”に，たびたび便りをよこしていた（18)。このように，母は娘に決して嫌なことを強制しなかったため，クリスティーは常に気持ちを理解してくれる味方と感じていたのではないかと考えられる。

さらに，クリスティーは自伝でも「何か困ったことがあった場合の，母の愛と理解の強さである。悲嘆の真っ暗などん底にあるとき，母の手にしっかりつかまっていることが一つの安心だった。…母は自分に力と生気を与えてくれる」(27) と語り，母ときわめて仲のよい母娘であったことを強調している（28)。

その後，クリスティーが 11 歳のときに父が病死して母と 2 人暮らしとなり，夜ごとふたりは本を朗読して過ごし（30)，話し相手として，気晴らしの相手として，母はおおいにクリスティーを頼りにしていたという（31)。このころから，クリスティーは「母に対して責任を果たしえると考えていた」(32) というように，母に頼るだけでなく，母にも頼られる関係だと感じていたようである。

クリスティーが 15 歳になると，母は，週二回，学校に通わせることにした（33)。ところが，その後数年の間に，クリスティーは学校を次々変わっている。そのころのことについて，クリスティーは自伝で以下のように振り返っている。「ミス・ガイヤーの学校に行っていたのは 1 年にもならなかった。母はまた別のことを思いついた。いつものように出し抜けに，あなたはパリに行くことになったわよ，と母は説明した」(34)，「母は例の持前の唐突さで，私はもう T 女子の学校へは戻らなくていいといった。『どうもあそこは気に入りません…考え方がおもしろくありません』。実際のところ，新しいところへ行くほうがおもしろそうに思えた。」(35)，「母が突然，マロニエ校には戻らなくていいといったときも，わたしは驚きもしなかった」(36)，「『この考えをあなたどう思う？』母が聞いた。私は新しい考えを歓迎した」(37)。このように，母は次々娘の学校を変更するのであるが，子どもの頃のフランス語教師の時と同様，娘がうまくいっていない，満足していない，という様子が見えると，その原因は娘ではなく学校にある，と判断していたのではないかと思われ，クリスティー自身も，最後のパリの学校に行ったあとについて，「母はもはや教育計画の変更を申し入れることもなくなった…母は，直感的にわたしが満足しているということを知ったのが本当のところだと思う」(38) と解釈している。つまり，クリスティーは母の決めたことに従っているのであるが，自分の気持ちをわかってくれる母の言う通りにしていれば自分にとって一番よい結果になると信じて，進んで受け入れている様子がうかがわれ，押し付けられ感やネガティブな従属感はなかったと考えられる。

以上のことから，クリスティーの母娘関係は，母を肯定的に評価し，非常に親密な関係を維持しつつ，母からの押しつけや母への劣等感が少ないことが特徴である「親密群」（赤木，2018）に該当すると推察される。また，「親密群」にみられる母への従属は，能動的な従属であったが，クリスティーの場合も同様に，母が自分を理解してくれているという確信から，能動的に母の選択を受け入れていたと考えられる。

青年期のアイデンティティの様相

クリスティーは，パリの学校に行っている頃に，ピアニストを目指したが，公衆の面前で演奏する気質がないと指摘されたことを認めてあきらめたという（40)。次に，18 歳ころに，オペラ歌手を目指すが，「オペラを歌うには声に力強さが足り

ないようだ」(41) という専門家の評価に納得してこれもあきらめている。このことについては，「わたしは現実に立ちかえり，希望的観測は捨てることにした」(43) と自分に言い聞かせていた様子がうかがえる。こういったクリスティーの挑戦に対して，母は反対することはなかったようである。それについては，自伝的小説である『未完の肖像』の中で，「マミーは私を声楽家になんかしたくなかったんでしょ？私がなりたいといえばさせてくださったのね」(42) と書いていることからも，娘の気持ちを優先していたことが推測できる。そして，退屈していたクリスティーに，小説を書いてみてはどうかと進めたのは母であった (44)。クリスティーはまず，短編小説，次に長編小説をさまざまな雑誌に送りつけたが，返送されてきた (45，46，49)。このとき，母がためらいがちに，隣人のイーデン・フィルポッツ (作家) に助言をもとめてはどうかと提案し，フィルポッツは，クリスティーの才能を評価してくれたという (47，48)。ここでも，母が娘に自信を持たせるための後押しをしていたことがわかる。それが自信になったのか，その後も様々なものを書き，20 歳すぎには自ら芝居を上演することに夢中になっていたようで (51)，それが，将来の探偵小説執筆に繋がることになったと推察される。

このように，クリスティーの青年期は，様々な夢にチャレンジして挫折する，という一般的なアイデンティティ模索中の青年の特徴がみられる。クリスティーが挫折しながらも健康的な模索を続けられたのは，「なにになるべきか，なにをすべきかなどということは，いっさい心配しなくていい…“その男性”があらわれれば，彼があなたの全生涯を変えてくれるだろう」(52) ということが自伝にも書かれているように，人生における重要なアイデンティティは，「幸せな結婚生活」を手に入れることだと思っていたからではないかと考えられる。実際，クリスティーは，後年，人気作家になってからも，「執筆は，もっとも重要な生活の一面ではなく，本を書くのは，これまでずっとそうしてきたように，他の仕事…のあいまに限られていた」(59) と述べており，本を書くなどということは，ほんの些細な気晴らしにしかすぎなかったと主張している (60)。そして，そのような幸せな妻としてのロールモデルとなったのは，母であったと思われる。母は，子どものころからの憧れの男性であった父と結婚し，深く愛し合っていた。クリスティーは，幸福な子供時代の一つの要因として，「深く愛し合い，結婚にも，親であることにも成功した両親だった」ということを指摘している (14)。父が最後に母に送った手紙には「おまえのような妻を持った男はかつていないよ。おまえと結婚して以来，毎年わたしはおまえを強く愛するようになった。おまえの愛情と同情とに感謝する…」(15) と書いてあり，父と母の愛情の深さがうかがわれる。クリスティーはこの手紙を母の死後，大事に保管していた。また，母の方は，父の死に打ちのめされ，クリスティーが「マミー。お父さんはもう安らかよ。幸せになってる。帰って来てほしいなんてマミー思わないわね」と慰めたのに対し，「いえ，わたしは望みますよ…お父さんが帰って来るんだったら，私はこの世で何でもします…私はお父さんがほしい，ここへ戻って来てほしい」(16) と言ったという。このような父母の幸せな結びつきを身近に見て育ったクリスティーは，大人になったら理想の夫というべき男性がかならず自分の前に現れるだろうと信じて疑わなかったという (17)。クリスティーの場合はさらに，幼少期より母が「何をするにも，またどんなときでも，物事に対する能力が彼女にそなわっているように感じさせてくれた」(43) ことで，自分も将来幸せな結婚ができる，と信じる「アイデンティティの感覚」を持っており，アイデンティティ・ステイタス理論 (Marcia，1966) からみると，早くから母をモデルにして自らをモデルに近づけようとする，「フォークロージャー」であったと考えられる。このような自己信頼の高さによって，青年期に壁にぶつかっても，自分にとって最も重要なアイデンティティは将来達成される，という確信を持てていたのであろう。

Table 3
列挙法による心理学的根拠資料の抜粋（青年期）

No	内容	引用元
40	ある来客の前で演奏することを命じられて，ピアノの前にすわったとたん，“圧倒的な気おくれを感じて”，悲惨な失敗を演じ，公衆の面前で演奏する気質がないと指摘されたことを認めてあきらめたという。	A, p.104
41	オペラを歌うには声に力強さが足りないようだと言った。	C, p.47
42	マミーは私を声楽家になんかしたくなかったんでしょ？私がなりたいといえばさせてくださったのね	G, p.218
43	「わたしは現実に立ちかえり，希望的観測は捨てることにした。	A, p.105
44	インフルエンザの回復期で退屈していたクリスティーに，母が小説を書いてみてはどうかと進めた。	A, p.106
45	クリスティーはまず，短編小説をいくつか書き，作品をさまざまな雑誌に送りつけたが，いずれもすぐさま返送されてきた。	A, p.109
46	つぎに試みたのは，長編の風俗小説。	A, p.110
47	あちこちの出版社に送りつけた。必ずしも意外ではないが，どの社も送りかえしてきた。このとき，母クララがためらいがちに，隣人のイーデン・フィルポッツ（作家）に助言をもとめてはどうかと提案し	A, p.111
48	彼（イーデン・フィルポッツ）の反応はすばらしかった。アガサの依頼を誠実に受けとめ，これまでの作品に目を通したうえ，入念な手紙を書いて激励した。	A, p.111
49	雑誌編集者たちはアガサの初期の短編をつきかえし，ヒューズ・マッシーはけんもほろろの応対をしたかもしれない。けれどもアガサはあきらめなかった。	A, p.113
50	ここでアガサは自ら芝居を上演することに夢中になった。	A, p.100
51	アガサははたちを過ぎ，しろうと芝居はいっそう大がかりになり，出演者の幅もひろがった。	A, p.100
52	なにになるべきか，なにをすべきかなどということは，いっさい心配しなくていい---各自の“生活史”が決定してくれる。“その男性”を待っていればいいし，“その男性”があらわれれば，彼があなたの全生涯を変えてくれるだろう。	A, p.96
53	母娘は＜ヘリオポリス＞号でイギリスを離れ，三カ月の予定で，カイロのジェジーラ・パレス・ホテルに逗留した。クララの付き添いのもとに，アガサはおよそ50回ものダンス・パーティに出かけた。	A, p.92
54	カイロから帰国すると，アガサは1年に4，5回も田舎でのハウス・パーティに招待されることになる。	A, p.97
55	彼はクリフォード家ではじめて会ったアガサに惹かれ。前もって約束していたパートナーがいるのに，彼女を強引に独り占めにして踊った。・・・アガサもまた，アーチーの魅力，知性，そして性急な求愛に惹かれた	D, p.54
56	生まれも育ちも，性向も，アーチーはすべてにおいてロマンティックだった。	A, p.124
57	ぜひ自分と結婚してほしい，と彼は言った。彼女はレジー・ルーシーとの非公式の婚約のことを説明したが，アーチーは歯牙にもかけなかった。いますぐ彼女と結婚したいのだとくりかえし，彼女も彼との結婚を望んでいる自分に気づいた。	A, p.128
58	クラリッサはアーチーがどうやって娘を養っていくのかと実際的な懸念をいだいた。・・・しかし，娘を苦しめるに忍びず，アガサが片意地になっていることに気づいて，二人の婚約をあえて許した。	D, p.55
＜参考：初期成人期以降＞		
59	執筆は，もっとも重要な生活の一面ではなく，本を書くのは，これまでずっとそうしてきたように，他の仕事---庭いじり，料理，外出，マックス（2番目の夫）の手伝い---のあいまに限られていた。	A, p.182
60	本を書くなどということは，ほんの些細な気晴らしにしかすぎなかった。	A, p.154
61	1919年は，アガサにとっていい年だった。きれいなフラットを見つけて，その飾りつけに熱中しているし，赤ん坊の娘はおとなしく，愛らしい。夫にも満足しているし，雇い人ともうまくいっている。	A, p.165

注）引用文献は略号で表記。A: morgan（上巻）,1984, B: morgan（下巻）,1984, C: Gripenberg,1994, D: Cade,1998, E: Christie（上巻）, 1997, F: Christie（下巻）, 1997, G: Christie,1962

その後，クリスティーは，20 歳前から積極的に未来の夫探しを始めている（53，54）。そして，22 歳のときに，アーチーと出会い，大恋愛の末，結婚した（55, 56, 57）。戦争中の別居期間を経て，本格的な結婚生活を始めた翌年は,「クリスティーにとっていい年だった。きれいなフラットを見つけて，その飾りつけに熱中しているし，赤ん坊の娘はおとなしく，愛らしい。夫にも満足しているし，雇い人ともうまくいっている」（61）とされていることから，結婚後しばらくは，青年期に確信していた「幸せな妻アイデンティティ」が実現したという感覚を持っていたと考えられる。

これは, クリスティーが該当すると推察される「親密群」が，青年期に健康的なアイデンティティを形成するという赤木（2018）の結果とも一致している。「親密群」の人格的特徴は，自尊感情，信頼感が高く，べきの専制（～すべきという感覚にとらわれること）が低いことであったが，青年期におけるクリスティーにも同様の人格的特徴が見られる。それは，娘の気持ちを尊重し，自信を持たせ，常に味方であると思わせてくれた母親との親密な関係によって獲得されたものといえるであろう。

高い基本的信頼感が育んだアイデンティティの感覚

基本的信頼感は，Erikson（1959　西平・中島訳 2011）が漸成発達理論の第一段階の発達主題「基本的信頼感　対　基本的不信」として提唱したもので，自分がこの世に存在することを肯定的に捉え，人生には生きる意味や生存する価値があり，世界は信頼するに足るものだという感覚を持つことと定義される。周囲の愛情に包まれ，幼いころには,「周囲のおとなを理不尽に横暴だと感じたことは一度もない」（4）という環境で育ったクリスティーは，両親や使用人たちへの信頼感が十分に高かったはずである。さらに，母が常に自己肯定感を持たせてくれたことで，基本的信頼感がより高められたと考えられる。

Erikson（1959　西平・中島訳 2011）は基本的信頼感が，青年期においてより時間的展望をもつものとなり，自らの人生を統合するものとなると述べているが，白井（1994）は時間的展望について，希望，目標志向性，過去受容，現在の充実感の 4 つの側面があるとしている。青年期のクリスティーは，未来について,「理想の相手と幸せな結婚をする」という明確な目標志向性を持ち，必ずそうなる，という希望を持っている。過去についても，子ども時代を肯定的にとらえており，現在においては，様々なことにチャレンジしていることからある程度の充実感を感じていたと考えられる。このように青年期に時間的展望が高かったことは，基本的信頼感の高さを示していると考えられることから，青年期のクリスティーは，基本的信頼感の高さによって「大人になったら理想の夫が必ず現れると信じることができる」という確かなアイデンティティの感覚を持てていたと考えられる。

以上のことから,「青年期のクリスティーはなぜ確かなアイデンティティの感覚を持ちえたのか」という心理学的問いに対する「母が常に味方になり，肯定してくれることで，十分な基本的信頼感を獲得できていたからではないか」という仮説は検証されたと考える。

さらに，児童期に小学校に通わず，同世代の友人との競争を経験していないことは，漸成発達理論（Erikson，1959　西平・中島訳 2011）における第 4 段階「生産性　対　劣等感」の活力である「有能感」の生成に支障をきたす可能性があるが，クリスティーの場合は，母が，常に自信を持たせ続け，うまくいかなくても，原因をクリスティーに求めなかったことで，有能感を獲得できていたと考えられ，それも青年期の健康的なアイデンティティ形成を可能にした一つの要因であると推察される。

総合考察

本研究では，母との親密な関係をもとに青年期にアイデンティティを形成していった女性の典型

としてクリスティーを取り上げ，母娘関係の特徴と娘の発達の様相を分析することで，以下のことが示された。

(1) クリスティーは両親と使用人から十分な愛情を受け，理不尽な思いを経験することなく育った。特に常に自分の味方であると思わせてくれる母からの深い愛情を感じることで，「基本的信頼感」が非常に高かったと考えられる。

(2) 母の教育方針で小学校に行かなかったが，母が，どんなときでも，物事に対する能力がクリスティーにそなわっていると感じさせてくれたため，十分な「有能感」を獲得できていたと考えられる。

(3) クリスティーは，青年期において，様々な挑戦や挫折をしながらも，「いつか必ず幸せな結婚ができる」という確信的なアイデンティティの感覚を持っていた。これは，ロールモデルとしての母との親密な信頼関係により形成されたと考えられる。

Erikson（1959　西平・中島訳 2011）は漸成発達理論において，「基本的信頼感」が健康なパーソナリティの礎石であり，それは，母性的な関係性の質によって決まるとし，さらに第1－第4段階の主題の達成度が第5段階のアイデンティティ統合に大きな影響を及ぼすと述べている。基本的信頼感とは，「世界はよいところだ，自分は愛されている」という感覚である。幼少期から，大人たちに愛され，理不尽な思いをすることがなかったクリスティーにとって，世界はよいところであり，周囲のだれからも愛されているという感覚が十分であったと考えられる。そして，そういう環境を作り，常に愛されていると感じさせてくれたのが母親であった。さらに，母親が常に味方であると感じさせてくれることの安心感は，「母親が無条件に自分の情緒的欲求を受け入れてくれるという安心感は，母親との信頼関係の構築を促し，娘の適応的な自立を支える」（水本，2015）という先行研究の結果とも一致している。したがって，このような親密な母娘関係が青年期の健康的なアイデンティティ形成を促進することが示されたと考える。

また，母を肯定的に評価し，母と親密な関係を持っているクリスティーは，母娘関係としては，健康的な結合タイプである「親密群」（赤木，2018）の特徴を示しており，健康的な人格的特徴（自尊感情，信頼感の高さ，べきの専制の低さ）も「親密群」と共通していることから，「親密群」の典型と考えられる。本研究では，量的研究で分類した「親密群」の典型としてクリスティーの事例分析をすることで，母親の受容的な養育態度が，青年期の娘の健康的な人格形成，アイデンティティ形成を促進する，ということを見出し，「親密群」の特徴について，量的・質的両面から理解を深められたと考える。

今後の課題

本研究では，青年期までを主な分析対象としたが，伝記分析の利点は，生涯を通した分析が可能なことである。クリスティーについて，青年期の健康的なアイデンティティ形成に寄与した母娘関係がその後にどういう影響を与えたのか，ということを検証することは，青年期までの分析を再検証する意味でも重要であると考えられる。

その後の資料をみると，クリスティーと母親との親密な関係は成人しても変わらず，母が亡くなるまで継続している。これは，母と娘の関係が成人になっても変わらない（渡邊，2004）という母娘関係の特徴を示しているといえるだろう。一方で，クリスティーは理想的と思えた結婚をし，母と同様に「幸せな妻」というアイデンティティを確立したように思われたのであるが，しだいに夫婦の溝が深まり，離婚を望む夫に対し，精神的に追い詰められて失踪事件を起こしている。最終的に離婚にいたるのであるが，そのあたりの経緯については，クリスティーの自伝でもあまり触れられておらず，身勝手な夫が愛人を作ったことが原因で離婚したとされている。また，自伝的な小説でも，自らを薄情な夫に裏切られた犠牲者として描くなど深く傷ついていた様子がうかがわれる

が，自伝的なものは恣意性が入るため，これだけでは検証は困難である。ところがその後の新たな資料をみると，夫婦関係を悪化させた要因としてクリスティーの人格特性が影響しているのではないかという推測が生じる。特に，青年期までの健康的な人格形成の土台となっていた基本的信頼感について，実は基盤に脆弱な部分もあったのではないか，という視点で検証を試みることは有意義であると考えられる。

赤木（2018）は，大学生に対する質問紙調査で，母親との健康的な結合タイプである「親密群」が，社会に出て母親と離れたときに，その健康性を保てるのかどうか，という疑問を呈したが，縦断研究を行うことが困難であるため，課題として残された。今後，「親密群」の典型と考えられるクリスティーの初期成人期以降について分析することで，一つの可能性を示すことができるのではないかと考えられる。ただし，クリスティーは，約100年前のイギリスの人物であり，現代日本の女子青年に単純に当てはめることはできない。将来，「幸せな妻」になることを最も重要なアイデンティティと考える女性は，現代では少ないであろう。したがって，時代や文化的背景の違いを考慮しながら，検証する必要があると考えられる。

引用文献

赤木 真弓（2018）. 母娘関係が娘のアイデンティティ形成と精神的健康に与える影響 ── 母娘関係尺度の作成を通して ── 発達心理学研究 , *29,* 114-124.

赤木 真弓（印刷中）. 娘のアイデンティティ形成を妨げる母娘関係の特徴 ── マーガレット・ミッチェルの伝記資料の分析から ── 青年心理学研究

Cade, J (1998). *Agatha Christie and the Eleven Days Missing*. HarperCollins.
（ケード，J. 中村 妙子（訳）(1999). なぜアガサ･クリスティーは失踪したのか　早川書房）

Christie, A (1997). *An Autobiography by Agatha Christie.* HarperCollins.
（クリスティー，A. 乾 信一郎（訳）(2004). アガサ･クリスティー自伝　上下巻　早川書房）

Christie, A (1962). *Unfinished Portrait*. HarperCollins.
（クリスティー，A. 中村 妙子（訳）(2004). 未完の肖像　早川書房）

Erikson, E. H. (1958). *Young Man Luther: A Study in Psychoanalysis and history.* New York: Norton.
（エリクソン，E. H. 西平 直（訳）(2002). 青年ルター　みすず書房）

Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle. Selected papers. In Psychological Issues.Vol.1*. New York: International University press.
（エリクソン，E. H. 西平 直･中島 由恵（共訳）(2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房）

Fischer, L. R. (1991). Between mothers and daughters. *Marriage and Family Review*, *16*, 237-248.

Gilligan, C. (1993). *In a different voice.* Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

Gripenberg, M. (1994). *Agatha Christie.* Rowohlt Tb.
（グリペンベルグ，M. 岩坂彰（訳）(1997). アガサ・クリスティー 講談社）

Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, *3*, 551-558.

三好 昭子（2008). 谷崎純一郎の否定的アイデンティティ選択についての分析　発達心理学研究 , *19*, 98-107.

水本 深喜（2015). 母親への親密性が青年期後期の娘の精神的自立に与える影響：「母親への親密性尺度」による検討 . 青年心理学研究 , *27*, 103-118.

Morgan, J. (1984). *Agatha Christie: A Biography.* HarperCollins.
（モーガン，J. 深町 真理子･宇佐川 晶子（訳）(1987). アガサ・クリスティーの生涯 上下巻 早川書房）

西平 直喜（1983). 青年心理学方法論　有斐閣

西平 直喜（1990). 成人になること ──生育史心

理学から――　東京大学出版会
大野 久（1996）. ベートーヴェンのハイリゲンシュタットの遺書の「自我に内在する回復力」からの分析　青年心理学研究 , *8*, 17-26.
大野 久（2008）. 伝記研究により自己をとらえる　榎本 博明・岡田 努（編）自己心理学 1　自己心理学の歴史と方法（pp. 129-149）　金子書房
Rastogi, M. (2002). The Mother-Adult Daughter Questionnaire (MAD): Developing a culturally sensitive instrument. *The Family Journal: Counseling and Therapy for Couples and Families*, *10* (2), 145-155.
信田 さよ子（2008）. 母が重くてたまらない：墓守娘の嘆き　春秋社
白井 利明（1994）. 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 , 心理学研究 , *65*, 54-60.
高木 紀子・柏木 恵子（2000）. 母親と娘の関係――夫との関係を中心に―― 発達研究, *15*, 79-94.
渡邊 恵（2004）. 母親と娘はなぜ親密か：青年期から成人期にかけて　柏木 恵子・高橋恵子（編）心理学とジェンダー：学習と研究のために（pp. 31-36）有斐閣 .

――2019.9.24 受稿, 2019.12.16 受理――